

『ビルマの豎琴』幻想をこえて：「アジア最後のフロンティア」への一視点（<特集>注目のアジア）

著者名(日)	永井 浩
雑誌名	Global communication studies = グローバル・コミュニケーション研究
巻	1
ページ	1-18
発行年	2014-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001199/

『ビルマの豎琴』幻想をこえて
——「アジア最後のフロンティア」への一視点——

永 井 浩

Beyond the Illusion of *The Burmese Harp*:
A Viewpoint with regard to
“The Last Frontier in Asia”

NAGAI Hiroshi

Since the end of WWII, the image of Burma (Myanmar) in Japan has changed several times.- “the country of the Burmese Harp” shortly after the war, “the military regime vs. Aung San Suu Kyi” since the end of the 1980’s, and “the last frontier of Asia” since 2011. In each period over these years, Japan’s commitment to this under-developed country in Southeastern Asia has been an issue to be discussed. Nowadays, foreign corporations, including those of Japan, are actively seeking entry into this new market under the banner of supporting the economic development of this country labeled the poorest nation of the world. If the former lacks understanding of the latter, however, the happiness and development wished by the people of Burma will not be realized. In this article, I attempt to seek what “true” mutual understanding is, describing the contents of the *The Burmese Harp*, a novel written by Michio Takeyama, which greatly influenced the perception of Burma in Japan.

キーワード： 上座仏教、泰緬鉄道、日本型オリエンタリズム

はじめに

第二次大戦後の日本において、ビルマ（ミャンマー）に対するイメージは何度か変化してきた。戦後長くは「豎琴」の国、1980年代おわり以降は「軍事政権対アウンサンスーチー」の国、そして2011年の民政移管後は「アジア最後のフロンティア」である。それぞれの時代ごとに、東南アジアのこの途上国への日本のかかわりが問われてきた。現在は、世界の最貧国

と位置づけられた国の経済発展を支援するという旗印のもとに、日本をはじめとする各国企業が新しい市場への参入を競っている。しかし、進出「する側」の一方的な思惑だけが先行し、「される側」へのただしい理解を欠いては、ビルマの人びとが求める幸せと発展をもたらすことはできないのではないだろうか。それはビルマにかぎらず、すべての国との関係についていえることであるが、この小論では、わたしたち日本人のビルマ認識におおきな影響をあたえてきた、竹山道雄の小説『ビルマの豎琴』を手がかりに、真の相互理解とは何かをさぐってみたい。

1. 鎮魂と平和国家の再建

『ビルマの豎琴』は、児童雑誌『赤とんぼ』に1947年から翌1948年まで掲載され、完結後まもなく本となった。1948年に毎日出版文化賞、1950年に文部大臣賞を受賞し、国語の教科書にもなかく収録された。新潮文庫版、金の星社版「若い世代に贈る必読の文学全集」ともロングセラーをかさねている。市川崑監督によって1956年と1985年の二度映画化され、ヴェネツィアの国際映画祭でサン・ジョルジオ賞受賞(1956年)、アカデミー賞の外国語映画賞の候補(1957年)、国際エジンバラ映画祭でローレル・メダル授与(同)、日本映画金賞受賞(1985年)など高い評価をえた。

毎日出版文化賞の受賞理由は、「児童文学の質と地位を高めた異色ある作品」で、「国境を越えた人類愛をうたい、ビルマの風俗なども面白く描かれている」とされる。新潮文庫のカバーには、「戦場に流れる兵隊たちの歌声に、国境を越えた人類愛の願いを込めた本書は、戦後の荒廃した人々の心の糧となった」と書かれている。最初の日活作品の広告には、「美しい豎琴の音に理想と祈りをこめて全世界に訴える人類愛の歌ごえ!!」という謳い文句がおどっている。原作、映画とも、多くの日本人に大きな感動をあたえた。

あらすじは、つぎのとおりである――

敗戦とともに中国大陸や東南アジア各地に出兵していた日本兵がぞくぞくと復員してくる。「みな疲れて、やせて、元気もなくて、いかにも気の毒な様子」で、「中には病人になって、蠟のような顔をして、担架にかつがれ

『ビルマの豎琴』 幻想をこえて

ている人」もいる。こうした兵隊たちのなかに、とても元気よく帰ってきた一隊があった。ビルマ戦線からの帰還兵たちである。

隊長は音楽学校を出たばかりの若い音楽家で、戦場で兵隊たちに熱心に合唱を教えた。愛唱歌は「はにゅうの宿」「庭の千草」「野ばら」などだった。「歌のおかげで、苦しいときでも元気がでるし、退屈なときにはまぎれるし、いつも友達同士の仲もよく、隊として規律もたって」いた。

すでに停戦が成立していたことを知らない部隊は、「はにゅうの宿」の合唱をおえて隊長の突撃命令を待つ。すると、森のなかから歌声が聞こえてくる。おなじ曲の英語「ホーム・ホーム・スイート・ホーム」である。それがイギリス兵たちの合唱だとわかった日本兵は、武器をおき、日本語で唱和する。つづいて、「庭の千草」についてもおなじ光景が展開される。そうなる、敵も味方もなくなった。戦闘はおこらず、「両方から兵隊が出ていって、手を握りました」

隊員のひとりに、ビルマの伝統楽器である豎琴をとても美しく奏でることができると水島上等兵がいた。だが彼は、ある戦場で行方不明となり、部隊では戦死したのではないかとおもわれる。日本の連合軍への降伏とともに英軍の捕虜収容所に入れられた日本軍兵士たちは、若い水島の身を案じながら故国への帰還の日を待つ。

帰国のせまったある日、収容所の柵の外にひとりのビルマ僧が凝然と立ちつくしているのに隊員が気づく。左の肩に豎琴をかつぎ、僧衣からむきだしになった右肩には青い鸚哥いんこうが一羽とまっている。僧はだまって琴を弾きはじめた。曲は卒業式の別れの歌「あおげばとうとし…」で、それが和弦をまじえて奏でられた。ビルマ僧は戦友の水島にちがいない、と気づいた兵士たちは柵から身をのりだして口々に叫ぶ。

「水島、われわれはあした日本にかえるのだぞ！」

「よかったなあ、とうとうもどってきて」

「おーい、水島。いっしょに日本へかえろう！」

しかし、ビルマ僧は日本兵にむかってふかく頭をさげ、にわかにな身をひるがえして、人ごみのあいだに姿を消してしまう。

後日、ビルマ人をつうじて一通の手紙が隊長にとどく。水島からのもの

だった。隊長殿と戦友諸君に宛てて水島は、「どれほど隊に帰って、一しょにつとめ、一しょに語り、一しょにうたいたく思っているか分かりません」「どれほど日本に帰りたいか、ことに変わりはないと思われる国に行って家の者にも会いたい、口にはいえません」と記しながら、それでも「私は日本には帰りません」との決意とその理由をつたえる。

それによると、水島は激戦のなかで脱走兵となり、各地をさまよい歩いた。その先々で彼が遭遇したのは、多くの日本兵の無残な遺体だった。また貧しいビルマの人びとからこころやさしく迎え入れられた。彼らは若き脱走兵を仏教の道にもみちびいてくれた。さらに英軍が自国犠牲者だけでなく、敵国である日本の無名兵士の霊も賛美歌とともに慰めることをした。もしすべての日本人が帰国してしまったら、ビルマ全土に散乱している同胞の白骨をだれが弔うのか。いまや本当のビルマ僧となり日々修行をつむ水島の心の底にはげしい囁きの声が聞こえてきた。

「あの「はにゅうの宿」は、ただ私が自分の友、自分の家をなつかしむばかりの歌ではない。いまきこえる豎琴の曲は、すべての人が心にねがうふるさとの憩いをうたっている。死んだ屍を異郷にさらす人たちは何と思うだろう！ あの人たちのためにも、魂が休むべきせめてささやかな場所をつくってあげられるのでなくて、——おまえはこの国を去ることができるのか？ おまえの足はこの国の土をはなれることができるのか？」

竹山はドイツ文学者で、『ビルマの豎琴』執筆当時は第一高等学校(現・東京大学教養学部)教授だった。その彼が、畑ちがいの分野に挑戦するにいたった動機は、当時の日本の風潮への反発だという。1958年にしるされた「ビルマの豎琴ができるまで」(以下「できるまで」)で、彼はこう回顧している。「戦死した人の冥福を祈るような気持ちは、新聞や雑誌にさっぱりでませんでした。人々はそういうことは考えませんでした。それどころか、「戦った人はたれもかれも一律に悪人である」といった調子でした」。

日本軍のことは悪口を言うのが流行で、正義派とされた。義務を守って命を落とした人たちのせめてもの鎮魂をねがうことが「逆コース」ともい

『ビルマの豎琴』幻想をこえて

われた。だがそれには承服できない竹山は、「逆コースでもけっこうです。あの戦争自体の原因の解明やその責任の糾弾と、これとでは別なこと」と言い切る。彼は自分の周辺で、「屍を異国にさらし、絶海に沈めた」若い人々をたくさん知っていた。

また当時の日本は、米軍占領下で経済は窮乏し、社会は混乱し、将来の希望の見えない状況にあった。文芸評論家の中村光夫は新潮文庫の解説で、「竹山氏の心底には、この世相にたいする憂慮と虚脱し荒廃した人々の心に、なんとか生きる道を見出させ、希望と信頼を復活させたいという意味がみなぎって」いて、それがこの大胆なフィクションを生み出したと述べている。また、この小説はたんなる児童むけの戦場物語でない。人間の生活にしめる音楽（芸術）と宗教の大きな位置がしめされており、大人の読者にも思想小説として感銘をあたえると評されている。

2. 「8月15日」の原点として

この鎮魂と平和国家の再建というメッセージは、『ビルマの豎琴』に関する新聞報道でも一貫している。朝日からいくつかの記事を拾いあげてみる。

新しい映画を紹介する1956年2月13日の夕刊は、「いまさら戦争映画を…とはいえない。これは日本映画としてどうしても作っておくべき戦争映画だと思う」として市川崑監督による映画化をとりあげ、評者（純）は「これを思い切ってやった日活の企画」を称賛している。作品の評価も高い。1958年8月25日の夕刊は、映画でヒットした『ビルマの豎琴』が菊田一夫によって劇化され、新国劇「十八番の兵隊物」として東京の新宿コマ劇場で上演されていると報じている。1980年8月11日の夕刊には、「障害者理解の一助」に盲人、ろうあ者も出演する公演記事が載っている。原作にはないろうあ者の兵士と百人の看護婦を登場させ、ろうあ者の兵士は、ほかの出演者によって交わされる会話を、仲間に手話で通訳してもらう筋立て。芝居に手話をいれて、難聴の客に理解してもらう試みのひとつとして、東京の劇団GMGが企画した。

1984年8月15日の社説「八月十五日の今日的意味」は、『ビルマの豎琴』

の主人公の水島上等兵のつぎの言葉から書き起こされている。「山をよじ、川をわたって、そこに草むす屍^{かばね}、水づく屍を葬りながら、私はつくづく疑念にくるしめられました。——いったいこの世には、何故にこのような悲惨があるのだろうか。何故にこのような不可解な苦悩があるのだろうか。われわれはこれをどう考うべきなのか——」

水島が戦友の霊を慰めるためにビルマに僧として残る心境を吐露した一節をうけて、社説は「この徹底した平和主義の名作が、敗戦直後の暗い世相の中で広く愛読されたことは、当時の日本人がどんな感慨を持ち、何を志向していたかを、はっきり示している」として、39年前の8月15日におもいをはせる。「悲しさ、くやしさを、虚脱感、解放感を味わったあと、だれもが心に深く刻んだのは、「これからは平和に生きたい」という願いであった」

こうした気持ちは、新憲法をはじめとする国の基本路線に取り入れられ、戦後の日本は、他国と武器を取って争うことはしない、世界でも珍しい国家としてやってこられた。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変、上海事変、日中戦争、そして太平洋戦争へと、息つくひまなく戦争をしてきた歴史を考えると、「三十九年の平和」の重さ、ありがたさを改めて痛感する。だが、「いま、われわれの「初心」は、「現実のきびしさに目を向けよ」という風圧にさらされている」と社説は読者に注意を喚起する。きびしい現実とは、米ソの核対決である。

これまでの日本の平和主義には、「戦争に巻き込まれるのはごめんだ」といった「内向き一辺倒」の色合いが濃かったが、これを「外向き」のものに脱皮させることが急務となったとされる。核の時代の最も現実的平和主義とは何か。「非軍事面での国際貢献を倍増しつつ、平和共存の先導役をつとめる」のが日本の役割であり、具体的には米ソの核戦争の回避と平和共存をめざして、日本はみずからの被爆体験にねざした「核アレレギー」を世界にむかって輸出する戦略を考えると、と社説は主張する。

いっぽう、国内では、戦後生まれの人口が57%を占めるようになり、平和と自由と繁栄のなかで、戦争体験の風化が徐々に進んでいる。だが、「大

『ビルマの豎琴』幻想をこえて

戦中、前途ある青年がいかに無念の死をとげたか、老人、婦女子がいかに悲惨な最期をとげたかは、これからも繰り返し語り継がねばならない」として、わが子の戦死に怒り悲しむ遺族を取材した地方記者の体験談や、「あの戦争は死ぬまで終わるものではない」という広島の被爆者の悲痛な声が紹介される。戦争とは、個人個人にそういう悲劇をもたらすものなのであって、「しかも」とつづく。「われわれは、被害者であっただけでなく、周辺の民族に対する加害者だったのである」

しかし、朝日の社説は、自国民の戦争体験については戦死者の遺族や原爆被爆者の声を当事者たちの出版物のなかからくわしく引用しながら、日本の戦争の犠牲者は「周辺の民族」とするすだけである。『ビルマの豎琴』から説き起こし、最後まで「われわれはこれまであまりにも無思慮だった」という水島上等兵のことばで結ばれているにもかかわらず、周辺の民族がだれを指すのかは不明である。ビルマとも、アジアの人びとも書かれていない。ひとりのアジア人の生も声もでてこない。

「戦争体験を語り継ごう」という呼びかけは、日本人の体験だけにかぎられた内向きなものにすぎず、日本の侵略戦争の犠牲となったアジアの人びとの体験にまで目をむけようという外向きの姿勢は見られない。われわれの「三十九年の平和」が、日本人の犠牲だけではなく、アジアの人びとの犠牲のうえに成り立ったものであるという認識はない。だから、「外向き」の平和主義をアジアの国々の人びともにつくりあげていこうというかんがえは生まれてこない。

この基本姿勢は、敗戦直後の朝日の社告「国民と共に立たん」¹⁾からほとんど前進がなかったことをしめしている。社告が新聞の戦争責任を謝罪したのは、日本国民に対してだけであり、アジア諸国の人びとはその対象から排除されていた。それから40年ちかくを経た社説は、たしかに日本の加害責任には言及したものの、依然としてアジアの「ア」の字もなく、「周辺の民族」に対する具体的な加害内容についてはまったくふれていない。

だが、こうしたアジア不在の平和主義は日本の代表紙だけの専売特許ではない。じつは、『ビルマの豎琴』で描かれた「ビルマ」はその実像とは似て非なるものであり、そもそもなぜ日本兵がここに登場するのも不明で

ある。

3. 「ビルマ」不在の名作

この小説が日本人のこころを打ち、映画で観客に涙を流させることに成功した最大の要因は、ビルマ僧となった水島上等兵のかなでる豎琴の静かでたおやかな音色である。しかし、ビルマではこのようなことはありえない。具足戒をきびしく持守ことがもとめられる上座仏教(原作では小乗仏教)において、僧が豎琴を奏でたり歌をうたったりすることは戒を破る行為であり、水島はすぐさま破戒僧として仏門から追放されてしまうであろう。ビルマ国民の約九割が上座仏教の教えに従って暮らし、僧は聖なる存在として人びとから尊敬されている。だが、そのような一国の文化の根幹への基本的な無理解、歪曲なしには、この「名作」は成り立たないのである。

この国には存在しない人食いや首狩りの「蛮族」まで登場する。水島は人食い人種に救われ、手厚いもてなしを受け、「未開な人とはいっても、何と気立てのいいやさしい人たちだろう」と感心する。

日本軍が戦争で「ビルマ人にひどい迷惑をかけた」とは書かれているが、ではなぜ日本はビルマに攻め入ったのか、どのような迷惑をかけたのかについてはふれていない。

日本軍がビルマに侵攻したのは、ビルマを植民地支配していた英国に代わって支配権を確立するためだった。日本軍参謀本部の特務機関「南機関」は、英国のきびしい弾圧・追及の手を逃れて1939年にアモイに密出国していた独立運動の指導者アウンサンに接近し、対英独立運動への軍事支援をもちかける。若きビルマ人は日本の腹のうちを見抜いていたが、30人の同志とともに1941年、海南島で日本から軍事訓練をうけ、同年末ビルマ独立義勇軍(BIA)を隣国タイのバンコクで結成、日本軍とともにビルマに進軍する。BIAは熱狂的な歓迎をうける。だが英国をビルマから追い出した日本軍は、ビルマ人の独立の期待を裏切り軍政をしく。

英軍の反抗によって戦局が悪化していくと、日本は1943年にバモーを主席とする名目的な独立をあたえ、アウンサンを国防相に就任させた。だ

『ビルマの豎琴』 幻想をこえて

が、物価の高騰、日本軍による泰緬鉄道建設への強制労働、憲兵隊の蛮行などによって、人びとの日本への反発はたかまっていく。アウンサンは共産党のタキン・タントゥンらと抗日地下組織、反ファシスト人民自由連盟 (AFPFL) を結成、1945年3月ビルマ国民軍とともに全土で対日蜂起に立ち上がる。その五ヵ月後に日本は敗戦をむかえ、ビルマからの撤退を余儀なくされる。ビルマに復帰してきた英国とアウンサンは粘り強い交渉をかさね、1948年1月の独立を勝ち取るが、彼はその直前に政敵により暗殺されてしまう。

ビルマ戦線は、日本の将兵にとって悲惨な戦場の代名詞となるほど過酷だった。その象徴が、1944年3月にビルマから英領インド侵攻をめざして日本軍が強行したインパール作戦だった。無謀な作戦は、英軍の反撃に遭って無残な失敗に終わり、参加兵力8万6500人のうち3万人が戦死・戦病死した。日本軍が敗走する道は累々たる遺体がつづき、「白骨街道」と呼ばれた。1945年の敗戦までの日本人戦没者は18万人にのぼった。水島はそのような日本軍の一兵士だった。

日本軍がインド侵攻への補給路としてタイ（泰）とビルマ（緬甸）のあいだに建設した泰緬鉄道では、ビルマ人をはじめとするアジア人労務者と英兵ら連合軍捕虜に多くの犠牲者が出た。1942年7月から約一年間、密林を切りひらいておこなわれた突貫工事で強制労働させられた彼らは、わずかな食糧しかあたえられず、日本兵から暴行、虐待をうけたうえ、熱帯のマラリア、赤痢、コレラなどで命を失った。

日本軍によって占領下の東南アジア各地から連行されてきた労務者は約22万人にのぼり、内訳はビルマ人10万6000人、タイ人・タイ華僑計3万人、マラヤ・ジャワ人8万5000人とされる [吉川、1995]。この鉄道建設にかりだされた経験をもつビルマ人作家リンヨン・ティンツルウィンビルマの労務者（「汗の兵隊」、ビルマ語でチュエ・ダッ）の数について、もっと多い17万8000人という数字をあげ、そのうち8万人が帰ってこなかったと書いているが [リンヨン、1981]、いずれにせよ尋常な数字でないことにはかわりない。アジア人労務者は3人に1人、2人に1人が亡くなるという高い死亡率だった。

連合軍捕虜は約6万1800人(英兵3万0141人、オーストラリア兵1万2994人、米兵668人など)で、死者は1万2400人。英国人捕虜への虐待や日英将校の対決などを描いた、デビッド・リン監督の英米合作映画『戦場にかける橋』(1957年)はアカデミー賞を受賞、主題歌「クワイ河マーチ」は日本でもヒットした。

この鉄道が、枕木一本にひとりの人骨が眠っている「死の鉄路」といわれるのはけっして誇張ではない。

しかし、『ビルマの豎琴』では、このような戦争の実態は描かれない。日本の軍政下で苦しむビルマの人びとは、それを仏教の教えによって運命として甘受しているかのように扱われる。にもかかわらず、現実とはかけ離れたフィクションの世界をもとに日本人は戦争と平和を語り、アジアをイメージし、この作品を反戦平和をうたいあげた名作としてきた。「オリエンタリズム」でしられるエドワード・サイードが欧米メディアのイスラム世界報道を批判的に分析した『イスラム報道』²⁾になぞらえていえば、「ビルマ」を舞台としながら、逆にその実像は隠ぺいされていることに気づかない。

だからといって、『ビルマの豎琴』の文学作品としての高い価値が損なわれるわけではない。竹山の執筆意図はじゅうぶんに読者につたわり、新聞や映画をつうじて平和のたいせつさをうったえるメッセージは若い世代に受け継がれてきた。問題は、アジアにおける日本の戦争を題材としながら、なぜアジア不在の物語になってしまったのかである。

4. 変わらぬアジア蔑視と日本優越論

さきの「できるまで」で作者があきらかにしているところによると、はじめに作品の舞台として構想されたのはビルマではなく、「シナの奥地のある県城」だった。だが、合唱による敵味方の和解という筋立てにはシナ(中国)は不向きだとおもった。「日本人とシナ人とは共通の歌がない」からだ。「共通の歌は、われわれが子供のころからうたっていて、自分の国の歌だと思っているが、じつは外国の歌であるものでなくてはなりません。「庭の千草」や「ほたるの光」や「はにゅうの宿」などでなくてはなり

『ビルマの豎琴』幻想をこえて

ません。そうすると、相手はイギリス兵でなくてはならない。とすると、場所はビルマのほかない」

だがここで、竹山は難問に直面する。「私はビルマに行ったことはありません。いままでこの国には関心も知識もなく、敗戦の模様などは何も報ぜられなかったのですから、様子はすこしも分かりません」。では何を参考にしたのか。電車のなかで客が読んでいた『月刊読売』にビルマ戦線の記事が載っていることを偶然しり、それを買って読んだところ、ビルマ全土に日本兵の白骨が累々と野ざらしになっていると報じられていた。ビルマから帰還した知人から、「日本兵が敗戦後に脱走してビルマ僧になっている者がある」ときいた。いちばん困ったのは、ビルマの風土や風俗だった。図書館で『世界地理風俗体系』を読み、古本屋でビルマの写真帳を手に入れ、さらに学生時代に旅行した台湾の「蛮人部落」の記憶をたよりに熱帯色ゆたかなビルマへの想像力をふくらませた。

このように、「『ビルマの豎琴』の「ビルマ」は、熟慮と周到な準備をへて選ばれた舞台ではなく、作品の中心的なイメージのひとつ（「歌う部隊」）が作者に否応なく選ばせた場所であった。そこにもし必然性があったとすれば、それは作者の内的必然というよりはむしろ、歴史的・文化的必然であった」[正木、1995]。

だが、この作品が戦後日本で読み継がれ、映画や演劇にもなり、新聞で日本の平和主義の原点と位置づけられてきたのは、これまでみてきた作者のメッセージだけによるものではないようにおもえる。それをうかがわせるのが、原作で展開されるビルマ人と日本人の生き方をめぐる比較論である。

作中には多くのビルマ人が登場するが、その描かれ方は、がいして無気力で退嬰的な存在として、である。「ビルマはさかんな仏教国で、住民は極度に低い生活に満足しています。人の心もおだやかです。よくいえば欲がなく、わるくいえば無気力です。あれだけの資源があり、国民の教育程度もたかいのに、近代の世界の国と国との競争で落伍したのも、これが原因のひとつです」。また、ビルマ人が都会の人でも日本人と違って洋服を着ないで、昔ながらのルーンジ（正確にはロンジー）を愛用しているのは、

「かれらはまだ自分が主になって力や富や知恵ですべてを支配しようとは思わずに、人間はへり下って、つねに自分より以上のものに抱かれ教えられて救ってもらおうとねがっている」からである。

こうしたビルマ人の生き方はいちがいに否定はされない。文明の利器もっていながらそれを戦争につかって「ビルマ人にひどい迷惑をかけた」日本人と、仏教に帰依し「そんなことは気にかけないで、いつもおだやかに静かにくらししている」ビルマ人と、どちらが野蛮なのかという軍服と袈裟論争も部隊ではくりひろげられる。

水島も隊への別れの手紙で、日本の敗戦はわれわれが「思い上がったあまり、人間としてのもっとも大切なものを忘れたから」だと述べている。しかし、「この国の人々のように無気力でともすると酔生夢死することになっては、それだけではよくないことは明らか」だとして、気力と小欲の双方がこれからの日本人だけでなく人類全体のめざすべき道だと説く。そして「どうしたらわれらは正しい救いをうることができるか——」、それも求めて自分はビルマに生きて、仕えたい、とむすばれている。

敗戦後の日本が進むべき道については作中でしめされていないものの、それはすでに暗示されている。無気力で近代化から取り残されたビルマの人びとは対照的に、日本人はよく働いて能率が上がる進取の気性に富み、戦争の過ちを犯したとはいえ文明国入りした。日本軍と英国軍が、日本の唱歌として親しまれてきた英国歌曲「はにゅうの宿」を両国語で歌いあい武器を置くという場面は、文明度の高い英国に対する日本の親近感と尊敬の念をしめしていないだろうか。

日本兵たちは水島をふくめ、自国の犠牲者を立派な儀式と讃美歌で弔う英国人に感銘を受ける。水島は、ビルマの僧となって亡き戦友の霊を英国人のように篤く慰めたいと願う。だが彼の別れの手紙からは、「生きとし生けるものすべてを慈しむ」という仏教の基本的教えを実践しようという姿勢はうかがわれぬ。弔うべきは日本の亡き戦友たちだけであり、日本の戦争によって殺されたビルマ人の霊についてはなにも考えられていない。泰緬鉄道の工事で、おおぜいの英国人捕虜が酷使され「何万というほど悲惨な死に方」をしたとは書かれても、その何倍にも上る、おなじよう

『ビルマの豎琴』 幻想をこえて

な運命を強いられたビルマ人のことにはひと言もふれていない。

ビルマ人は日本人の引き立て役としてしか描かれておらず、日本人が肩を並べるべき仲間はやはり英国人なのである。中国文学研究者で評論家の竹内好は、1958年8月15日から三日間にわたって東京新聞(夕刊)に掲載された「二つのアジア観」で、「『ビルマの豎琴』では、日本人、ビルマ人、カチン人が差別してえがかれている」として、竹山の秩序愛好心は民族間に平等を欲しないほど強いと批判している。

竹山のビルマにたいする蔑視はやがて、日本は他のアジア諸国とは異質だという命題へとつながり、日本は歴史発展の型としては西欧と同質であるとする主張となる。彼は「日本文化フォーラム」という反共リベラルの学者や芸術家たちの集まりで、これが日本の進むべき道だとする文明論を展開する。だが、日本はアジアではないといいながら、アジアにおける支配権は失いたくない。そこで、同フォーラムの共同討論をまとめた『日本文化の伝統と変遷』(新潮社刊)で、竹山は「日本の先例は、これから日本が今までやってきたようなことをやろうとするほかの国のためには、ずいぶん参考になるでしょう」とかんがえる。竹山だけでなく、討論のほかの参加者もおなじ趣旨の発言をしている。

こうした姿勢の底流には、日本が「西欧(その今日のチャンピオンはアメリカだ)と中間に立って、買弁としてサヤを取りたいという」隠された本心があると竹内は看破し、それを「脱亜論の嫡出子」「新版脱亜論」と評している。サイードの『オリエンタリズム』が発表されるのは1978年だが、それにならえば日本版オリエンタリズムと呼んでよいだろう。欧米の優等生である日本は、オリент(アジア)の一員でありながら彼らとは異質であり、政治的、経済的、文化的に遅れたアジアを発展させていく盟主とならなくてはならないとされる。だがその「アジア」は、実像とは異なったものであり、日本のアジア支配のために都合よくイメージされたものにすぎない。

『ビルマの豎琴』が日本人のこころをとらえつづけた理由が、鎮魂と平和のメッセージだけでないのではないかと思われるのは、このようなアジアに対する日本人の優越感という隠されたメッセージが潜んでいたからで

あろう。

竹山に代表されるかんがえは、対米協調という戦後日本政治の基本的レールを敷いた吉田茂首相のアジア認識と合致する。吉田は、外交官時代の戦前から「親英米」であり中国人蔑視観の持ち主だった。アジア蔑視は戦後も変わらず、欧米、とりわけ米国との協調で日本がアジアの指導的立場に立つというのが彼の発想だった。朝日新聞の政治記者として保守政治家たちのアジア観を追ってきた若宮啓文は、吉田の著書『回想十年』をもとに彼のかんがえを以下のように要約している。

- 一、明治以来の独立国である日本と、新興独立国のアジア諸国は区別されるべきだ。
- 一、今日の日本は政治・経済・社会事情などで、アジア的というより西欧的だ。
- 一、アジア・アフリカは民度も低く、未開発で後進国の域を出ない。
- 一、しかし地理的・人種的には、西欧人より日本人の方がアジアには親近感がある。
- 一、アメリカの資金と日本の技術を結合して東南アジアを開発するのがいい。
- 一、アジア・アフリカの経済開発を援助し自由主義の価値を知らしめるために日本が寄与すべきだ。

アジアがこうした日本を歓迎しているのかどうかは、吉田や竹山の関心の埒外である。

そして、アジアの現実から出発しない平和論は、1968年に思わぬ不協和音を生じさせる。「高まる“ビルマの豎琴”論争 エンタープライズ寄港をめぐる」という見出しで、2月6日の朝日新聞は、世界初の原子力空母である米軍のエンタープライズの米軍佐世保基地への入港をめぐる、竹山道雄が賛成発言したことに批判の声が高まっていると報じた。賛否両者の朝日への投書が150通を越えたとして、その内容を紹介している。

エンタープライズの佐世保寄港は初めてで、反核やベトナム戦争反対をさけぶ新左翼系学生団体や革新政党组织などによる大規模な寄港阻止闘争が展開された。各界の意見が紹介された1月17日の朝日で、竹山は「日本

『ビルマの豎琴』 幻想をこえて

はベトナム戦争に協力すべきで、エンタープライズ寄港は当然。核アレクギーも政治的作為の結果である」と述べた。この発言に対して、『ビルマの豎琴』の精神だった反戦、平和の精神は死んだのか」という投書が殺到した。静岡の主婦は「今いずこビルマの豎琴」と問いかけ、松本市の主婦は「お姫様が突然鬼姫に変わったよう」とショックを受けた。批判に対して、竹山は朝日のインタビューでこう答えた。「平和は貴い。だから平和を叫ぶだけでなく、どうして平和を実現するかを考えなければならないんです。今は共産主義を拒否することが平和の道です」

だが、ここで問われているのは、竹山の政治姿勢の是非ではなく、日本人がみずからの願望あるいはイデオロギーの投影として「アジア」と戦争を認識し、平和の尊さをうたいあげることに自己満足していることではないだろうか。事実の正確な認識——これもなんらかの理念やイデオロギーから完全に自由ではありえないが——を出発点とするよりも、みずからの理想や願望などをつうじて対象を解釈しがちな態度は、保守派にも革新的といわれる人びとにも共有されていくが、前者の論客のひとりが竹山だった。

竹山が『ビルマの豎琴』を書いたときは、当時の日本の一面的で乏しいアジア情報によって実像からかけ離れた「ビルマ」が描かれてしまったのはやむをえない面があろう。だがその後、アジアと日本の関係が修復されるにつれて私たちのビルマ理解も深まり、作品の記述の間違ひもわかってきたはずである。

たとえば、ビルマの近代化がおくれ、人びとの暮らしが貧しい大きな原因は英国の植民地支配によるものであり、仏教とは関係ない。すべての人びとが無気力なのではなく、英国からの独立闘争に立ち上がった勇敢な若者たちがいる。アウンサンらとその代表である。独立運動の活動家らは「タキン党」を結成し、黨員各自の名前の前にビルマ語で「主人」を意味する「タキン」をつけて呼び合った。彼らは日本人とおなじように、「自分が主になって力や富や知恵」を英国から取り戻すことで国の近代化と発展をめざそうとした。日本が英国にかわってビルマの主人になろうとすると、彼らは日本をファシストと呼び、新たな主人の追放に立ち上がった。

仏教は、人びとに現世を受動的に生きよ、などと教えておらず、逆にいまの一瞬一瞬をたいせつにして前向きの努力をつみかさねることが幸せにつながるのだ、と説いている。独立運動には僧侶たちも連帯した。「諸行無常」の世界観は、英国の植民地支配も日本の軍事支配も未来永劫につづくものではないことを教えている。

しかし、戦後日本の平和文学の代表作は、そのような事実に目をむけることなく独り歩きをつづける。竹山は「できるまで」で、ビルマから来た三人の新聞記者から、「あの本の英訳本を読んで、宗教的にまちがったところがあるが、ビルマ人は宗教にきわめて敏感だから、これをビルマで紹介するときには気をつけるように」といわれた事実をあきらかにしている。だが原作は、日本でそのまま版をかさね、私たちの戦争責任をあいまいにしたまま、多くの日本人にあやまったビルマ観を植えつけることに貢献している。さきの朝日の社説は、『ビルマの豎琴』を軸に新しい平和主義の確立をうったえながら、作品の舞台となったビルマとはどのような国なのか、日本は戦争でそこの人びとに何をしたのかについての具体的な言及はいっさいなく、「名作」の記述内容の検証もおこなっていない。

映画のロケはビルマではなく、隣国のタイでおこなわれた。両国とも上座仏教の国だが、人びとの生活習慣には微妙な違いがある。ビルマへの造詣が深く、NHKで長年ビルマ語の国際放送にたずさわってきたジャーナリスト田辺寿夫によれば、たとえば僧院にあがるとき、ビルマ人は入口で履物を脱ぐがタイ人は入ってから脱ぐ。映画に協力したビルマ人たちは、こうした点や、僧が豎琴を奏でることはもちろん、腕に金属の輪をはめるようなこともないと指摘したという。だが、日本映画の巨匠といわれる市川監督の耳には聞き入れられなかったようだ。彼は『キネマ旬報』(1985年6月下旬号)で、こう語っている。「(竹山道雄に)「私はビルマに行ったことはない」と言われて驚嘆しました。行かないで、見事にその風土や人間が描けている。よし、こっちも弱音をはかないで、立派にビルマを表現しようと意気込んだんです」

映画『ビルマの豎琴』は、いまだにビルマでは上映をゆるさされていない。ビルマの教科書で日本兵は、「ファシスト日本兵」と書かれている。

『ビルマの豎琴』 幻想をこえて

映画が再映画化された翌年、日本のシナリオ作家協会が中国のシナリオ作家を招いて東京でシンポジウムをおこなったさい、中国のシナリオ作家たちは「反戦平和」の古典的名作をこう批判した。「これは侵略軍の兵士の鎮魂の映画にすぎないのではないか、日本人はただその程度のことを反戦的な表現だと思っているのだろうか、侵略された側のことを考えないのだろうか！」³⁾

おわりに

『ビルマの豎琴』は、ビルマを舞台とした戦争と平和の名作として、戦後の日本で高い評価を受けてきたが、そこに描かれたのはビルマの現実からはかけ離れた「ビルマ」と「戦争」と「平和」だった。この作品は、日本人の物語としての平和のメルヘンにすぎず、「国境を越えた人類愛」「全世界に訴える人類愛」という謳い文句は看板に偽りありといえよう。そして現在、アジアと日本との幅広い相互認識が深まったとはいえない状況のなかで、今度はビルマの経済発展への日本の貢献という新たな物語が始まろうとしているようにみえる。それを日本人の物語として終わらせるのではなく、ビルマと日本の「共通の歌」へと発展させていくためには、戦後日本の古典のひとつをあらためて批判的に読み解く作業はむだではないだろう。

注

- 1) 朝日新聞は、1945年11月7日に「国民と共に立たん」と題する社告を出し、大東亜戦争（アジア太平洋戦争）への協力の責任を反省し、社長以下編集幹部が総辞職し、今後は国民の機関として民主主義国家の建設に貢献することを宣言した。だが、日本のアジア侵略への反省とアジアの人びとへの加害責任についての言及はなかった。毎日、読売なども同様の姿勢をしめしたが、アジアへの加害はやはりふれなかった。
- 2) 『イスラム報道』の原題は“Covering Islam”。サイドは“cover”を「報道する」と「隠ぺいする」の二重の意味で使い、欧米メディアのイスラム世界に関する報道がオリエンタリズムの偏見によって、イスラムの真実を逆に隠ぺい、ないし歪曲している事例を分析している。
- 3) 馬場公彦『『ビルマの豎琴』をめぐる戦後史』（法政大学出版局）8ページ

参考文献

- 竹山道雄 (1959) 『ビルマの豎琴』新潮社
- 正木恒夫 (1995) 『植民地幻想』みすず書房
- 馬場公彦 (2004) 『『ビルマの豎琴』をめぐる戦後史』法政大学出版局
- 吉川利治 (1994) 『泰緬鉄道——機密文書が明かすアジア太平洋戦争』同文館
- リンヨン・ティンツルウィン (田辺寿夫訳) (1981) 『死の鉄路——泰緬鉄道ビルマ人労働者の記録』毎日新聞社
- 田辺寿夫 (1996) 『ビルマ——「発展」のなかの人びと』(岩波書店)
- 越田稜・編著 (1995) 『アジアの教科書に書かれた日本の戦争〈東南アジア編〉』梨の木舎
- 竹内好 「二つのアジア観」(1966) (竹内好評論集第三巻『日本とアジア』) 筑摩書房
- 若宮啓文 (1995) 『戦後保守のアジア観』(朝日新聞社)
- エドワード・サイド (浅井信雄、佐藤成文訳) (1996) 『イスラム報道』みすず書房
朝日新聞